

Title	マイケル・オークショット著『政治における合理主義、その他論集』
Sub Title	M. Oakeshott : Rationalism in politics and other essays, 1962
Author	奈良, 和重(Nara, Kazushige)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1965
Jtitle	法學研究 : 法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.38, No.3 (1965. 3) ,p.118- 121
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	紹介と批評
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19650315-0118">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19650315-0118</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

文。後発性の傷害といつても、肉体的・外科的なそれではない。

児童の幼児期の体験はその精神・心理的発育にとつて障害にならない例として、空襲その他の戦時体験をあげ、空襲下の都市に生活した子供の方が、不十分な教育、監督の下で疎開生活を送つた子供よりも非行に陥る例が少いことをあげ、正常な児童は家庭その他の教育環境に問題がない限り、精神を傷つけられるような出来事に対して抵抗力が強い。又、性犯罪者には放任等により人格的に発達の方角をあやまつた環境条件により非行に陥つた者が多いこと、子供達が成年者と性的に接触すると、恐怖・不安・責任感を伴う急性の反応を示すけれども、周囲の冷静な態度によつて急速にやむものがある。しかし、動揺したり、非難したり、罰したりするような好ましくない態度とか、警察や法廷での出来事は経験した性犯罪以上に精神的外傷を与えやすい。幼児期に蒙つた性犯罪の外傷は実務上証明されず、稀であるが、不安定な生長期、破瓜期に倒錯的な行為によつて強い刺激を受けると、その影響は顕著に残るものである。性犯罪者は幼児期に性犯罪の犠牲者であつたことはむしろ稀で、悪しき環境、神経症的な障害や精神病的な性格特性をもつという意味でその人格形成の早期に誤つた方向に発達した例が多く見られるといふのである。

このような結論から、我々はいわゆる変質者に対する闘争、その処罰を求めるために、児童を証人として喚問することについて、大いに心しなければならぬ点の多いことを知るのである。

(一九六四・一一・五稿)(宮沢浩一)

Michael Oakeshott:

## Rationalism in Politics and Other Essays

London, Methuen & Co., 1962. 333 pp.

マイケル・オークションット著

『政治における合理主義』その他論集』

政治活動についてのわれわれの理解がより一層深くなれば、それだけわれわれはもつともらしいが誤つた類推によつて支配されなくなるし、偽りであるか、もしくは不適切な図型に誘惑されることもなくなる。そしてわれわれが、われわれ自身の政治的伝統というものをより一層徹底して理解して、その全体の資産がよりよくわれわれに利用できるようになればなる程、無知なる者と軽卒なる者とを待ちうけている幻想、つまり政治においてわれわれは伝統なくしてやつて行けるというような幻想、伝統の省略がそれ自体で充分な行動の指針であるといった幻想、政治には何処か、安全な船着き場とか到達される目的地があるとか、見つけられる進歩の筋糸でもあるかのような幻想を抱くことはなくなる。《現実世界はあらゆる可能な世界のうち最善のものであり、そこですべてのものは必要悪なのだ。》(The world is the best of all possible worlds, and everything in it is a necessary evil)

M・オークショットは、ロンドン・スクール・オブ・エコノミックスの政治学講義の就任講演をこのように結んでいる。かれは、グレアム・ウォラスとハロルド・ラスキという偉大な教師に続き、*a septic* が後任となることはいささか忘恩のように思われると言う。だが、かれはたんなる懐疑論者であろうか。「The world is the best of all possible worlds」と言つてのけるだけのかれの勇氣は、*「まことに Hic Rhodus, hic salta* という言葉に通ずるものであり、われわれは、二人の偉大な教師に劣らず、オークショットのすさまじい個性を感じさせられるのである。たしかに、オークショットはウォラスとかラスキのように、たゆみなき研究活動、あるいは確信をもつた実践活動のゆえに名声を高くしている学者ではない——少なくとも、わが国ではあまり知られていない。そしてかれの書物から、ユニークな思想なりイデオロギーを引き出すことは困難であるし、事実、そのような希望は空しく裏切られるであろう。そのような希望の空しさを誰よりもよく知つているのはオークショット自身であり、この書の意図もまたそこにあると言つてよい。以下、いかにもかれらしいと思われる部分にだけ触れておく。

イデオロギーとは思考の技術、あるいは技術的知識 (technical knowledge) である。政治的イデオロギーは政治的伝統というものの省略、抽象観念にはかならない。むしろ、戯画が顔のさまざまに様態をあらわにしてくれるように、イデオロギーの歪んだ鏡が伝統にひそむ重要な事柄をあらわにしてくれることは可能であろう。伝統がイデオロギーに還元された時、それがどのように見えるか。そ

のような知的試みとしてなら政治教育にとつて有用な一部分となることは否定しない。しかしながら、イデオロギーの規定にしたがつて現実の諸制度をあらためることは深く慎まねばならない。本来、政治教育とはイデオロギーを教授し、政治行動に先行して抽象的な理念とか目的を学ばせることではない。それは伝統の行動様式、政治的伝統のもつ *intimations* を提示することである、とオークショットは繰返し主張している。

ところで、このような政治に対するイデオロギー的接近は何時頃生じたか。それは、ルネッサンス以降の合理主義的精神とともに長い歴史をもつている。本書の冒頭にオークショットは、*Vauvenargues*, *Maxims et Reflections* から *Les grands hommes, en apprenant aux faibles à réfléchir, les ont mis sur la route de l'erreur* という一節を引用している。偉人たちはベーコンでありデカルトであり、かれらの *Novum Organum* と *Discours de la méthode* はそれぞれ伝統破壊的な合理主義的思考の典型であつた。過去四世紀にわたつて、ヨーロッパのあらゆる知的領域は、この合理主義的思考に浸潤されてきたのである。その政治思想に対するインパクトも強烈であつた。マキアヴェリをはじめ、ホッブス、ロック、ベンタム、ゴッドウィン、ミル、そしてマルクスとエンゲルスは言わずもな、これらの巨魁がもたらした混乱したイデオロギーの影響力は如何に大であつたか。現実にも、アメリカ革命と独立宣言は *secular rationalism* の所産であり、フランス革命とその後の社会再建の冒険もみな合理主義に鼓舞されたものであつた。オークショットは

現代のブレイカメントを政治思想家にのみ帰せしめようというのではない。しかし基本的には、ヨーロッパ近代の政治は、合理主義の「誤りの途」に踏み込まざれば、その深い轍から逃げきれずにいるという見解に立つている。

政治における合理主義に対するこのような厳しい態度は、かれのイデオロギー嫌悪から当然のことである。合理主義的政治、すなわち政治のイデオロギー的知識は、政治をエンジニヤリングと同一化する。それは「完全性の政治」「ユニフォームテイの政治」、あるいは「書物による政治」である。それらこそ知的倨傲と政治的未経験以外のなにものでもない。しかもオークショットは、合理主義者は自己の誤謬を修正できないこと、かれがより誠実により深刻に合理主義的になれば、そのことによつて一層誤謬から逃れられないことを鋭く突く。合理主義者は本質的に教育不能 (ineducable) である。さらに、合理主義者は排他的な合理主義的教育の形態へと向わざるを得ないのである。「私は、ナチズムあるいはコミューニズムの手荒らな目的がすぐれて合理主義的な教義を訓練するほかに如何なる教育をも許さないと云つてゐるのではなく、どのような形態にせよ一般に合理主義的な性格ではないような教育に対して、どのような余地をもあたえようとしないもつと巧妙な手口のことを言つてゐる」という言葉のうちには、合理主義への見事な透視とともに道徳的な怒りすら込められてゐるように思われる。

オークショットのいう《合理的》行為とはどのようなものか。それは一定の環境において規定された *idom of activity* に適切な行

為のことである。当の *idom of activity* の一貫性が保存され、強化されてこそ合理的行為と呼びうるのである。人間の道徳的行為といふものは *a habit of affection and behaviour* であつて *a habit of reflective thought* ではない。われわれは *Ed. H. N. ick* の保守主義を想起せざるを得ない。そして、オークショットはその性質をいふように簡潔に述べたのである。To be conservative, then, is to prefer the familiar to the unknown, to prefer the tried to the untried, fact to mystery, the actual to the possible, the limited to the unbounded, the near to the distant, the sufficient to the superabundant, the convenient to the perfect, present laughter to utopian bliss. Familiar relationships and loyalties will be preferred to the allure of more profitable attachments; to acquire and to enlarge will be less important than to keep, to cultivate and to enjoy; the grief of loss will be more acute than the excitement of novelty or promise. かくて、政治については保守的であることは「人間の環境の現状を容許すること」であり、統治の仕事は現実の混乱に秩序をもたらすことであつて、新しいヴィジョンに情念をかきたてることではない。

もはやわれわれは、多くを語る必要はない。オークショットの保守主義は、伝統とは何であるかが問われずにすむような秩序だった社会においては説得力があろう。だが、かれの言うように、政治的危機はつねに政治活動の伝統内部にあらわれ、《救済》は伝統そのものの害われざる遺産から生ずる、とはかぎらない。伝統そのものが

崩壊しつつあるか、もしくは無定型な社会においては、*idiom of activity* が行動内容を規定することが不可能である。そして、まさにそのようなラディカルな変化が現代社会の普遍的傾向であるとすれば、それが合理主義的イデオロギーによつて正当化されるかどうかは別として、かれの診断をいちじるしく狭隘化することとなる。ともかく、オークショットはイギリス固有の学者である。

(奈良和重)